
Photographer　Masahiro Hiroike



廣池 昌弘
Masahiro Hiroike
写真家 ・ Photographer

1962年生まれ、鳥取県出身
鳥取県南部町 在住

Website: www.masahirohiroike.com

Instagram: www.instagram.com/masahirohiroike/

Phone: +81 90 6212 4482
E-Mail :hiroike@masahirohiroike.com

学歴　Education

1985　広島大学工学部船舶海洋構造物工学課程　修了

職歴　Work History

1991～2021　独立系システムエンジニア兼ウェブシステム開発者
1985～1991　新キャタピラー三菱株式会社　CAD、産業用ロボット開発

資格　Engineering Certifications

1988　特種情報処理技術者（国家資格）
1986　第一種情報処理技術者（国家資格）

受賞歴　Awards

2026　HIPA Photo of the Day: 01.02.26
2025　SMITHSONIAN MAGAZINE PHOTO CONTEST NATURE Finalist
HIPA Portfolio Of The Week 12.25.24
2024　Trieste Photo Days 2024 festival open call selected 1 photos
2023　LensCulture Critics' Choice 2023　winner (Selected by Christie's Darius Himes)
2022　Nature Conservancy's 2022 Global Photo Contest Wildlife Honorable Mention
2021　SMITHSONIAN MAGAZINE PHOTO CONTEST Photo of the Day: 01.29.21
TIFA (Tokyo International Foto Awards) Silver x 1, Bronze x 2
BNW Minimalist Photography Prize 2020-2021 BEST 50 Photographers
Trieste Photo Days 2022 festival open call selected 8 photos
ONE EYELAND WORLD'S TOP 10 LANDSCAPE PHOTOGRAPHERS JAPAN'S RANK #1
2020　Sony World Photography Awards 2020
Professional "Natural World and Wildlife" 2nd place
5th 35AWARDS "Motion" 3rd
IPA（International Photo Awards）Professional Nature-Astrophotography 2nd place
6TH Fine Art Photography Awards NOMINEE x 3
SMITHSONIAN MAGAZINE PHOTO CONTEST Photo of the Day: 12.04.20
2019　National Geographic Photo Of The Day,APRIL 5, 2019
2017　ニッコールフォトコンテスト 特選（カテゴリー4位）
National Geographic Photo Of The Day, AUGUST 30, 2017 & Best of August 2017
2015　オリンパス・オープンフォトコンテスト グランプリ
ニッコールフォトコンテスト 特選（カテゴリー4位）
富士フイルムフォトコンテスト　優秀賞
1999　CATV INTERNET ホームページコンテスト 優秀賞（第２位）

個展　Solo Exhibitions

2024　「麗しの日本」　鳥取県日南町美術館
2023　「Japonia」　Jelenia Góra Sieplice Natural History Museum in Poland
「 Fantazja」　DSAFiTA Gallery in Poland Wrocław
2022　「QUEST－美の探求」ピクトリコギャラリー（東京）
「廣池昌弘写真展」鳥取県江府町エバーランド奥大山
2021　「QUEST－美の探求」 鳥取県日南町美術館
「QUEST－美の探求」 鳥取県南部町裕生出会いの館
「QUEST－美の探求」鳥取県米子市美術館（鳥取県文化振興補助金）

グループ展　Group Exhibitions

2020　「 Sony World Photography Awards 2020 受賞作品展 」
ソニーイメージングギャラリー銀座

審査員　Juror

2025　PSA (The Photographic Society of America) “PID Landscape Competition”
2022　7th 35AWARDS（50ヶ国各一人）

出版　Publications

2026　ヤマケイカレンダー2027「知られざる 麗しの日本」山と渓谷社
モロッコ　NOOR ART MAGAZINE No.10　“Himebotaru”
モロッコ　NOOR ART MAGAZINE No.8　“City Scape”
モロッコ　NOOR ART MAGAZINE "Spring Collection"
2025　ヤマケイカレンダー2026「知られざる 麗しの日本」山と渓谷社
2024　ヤマケイカレンダー2025「知られざる 麗しの日本」山と渓谷社
2020　写真集「HIMEBOTARU」ちいさな今井
2019　写真集「QUEST／探求 第１集」今井出版

雑誌掲載　Press

2025　雑誌WILL 12月号「現代写真家シリーズ 廣池昌弘 流動する秋の時間」
2024　雑誌 家庭画報 9月号 口絵6ページ

TV出演　Broadcast

2022-23　中海テレビ放送「山陰グラフィー」全１１話 主演

参画　Affiliation

2025　Atelier Quindici（国際現代アートプロジェクト）

Bio

***30*余年のシステムエンジニアから写真家へ転身**

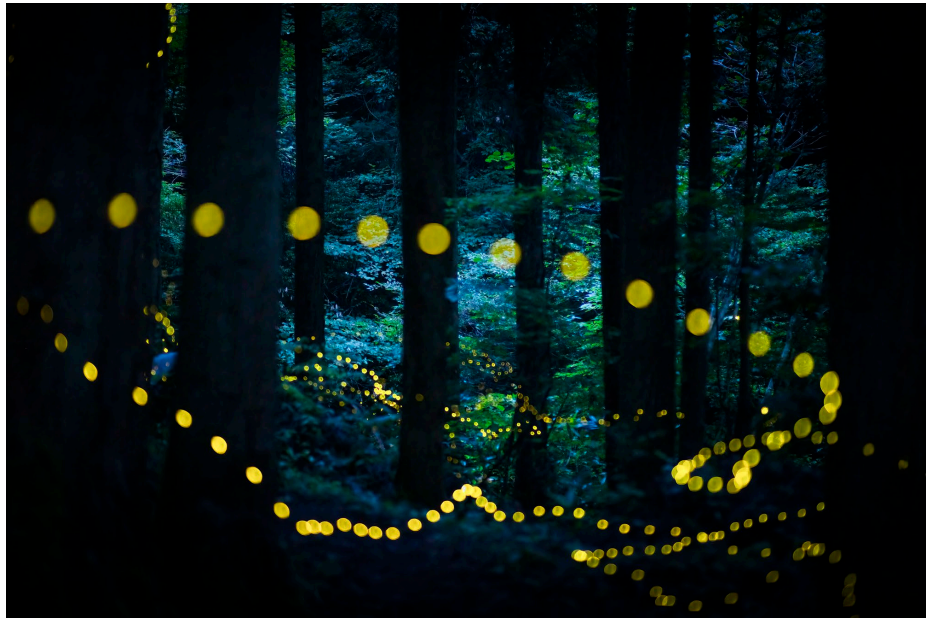
廣池昌弘は1962年、鳥取県生まれの日本の写真家。広島大学工学部で黎明期のコンピューターに出会い、30年以上システムエンジニアとして産業用ロボットやCAD、WEBシステムの開発に携わった。当時日本最高位の国家資格を取得している。2005年、FLASHを用いた写真表示プログラムの開発をきっかけに本格的に写真を始める。

参考：写真ビューアー「Photobook」

2020年、Sony World Photography Awardsのプロフェッショナル部門でファイナリストに選出されたことを機に、プロの写真家としての活動を開始。IPA、35AWARDS、LensCulture Critics' Choice、Smithsonian Magazine Photo Contestなどの国際コンテストで継続的に受賞を重ね、現在は国際コンテストの審査員も務める。

日本とポーランドで美術館主催の個展が開催され、2024年には90年の歴史を持つ「ヤマケイカレンダー」の作家に選出された。自然への畏敬と、水墨画などの日本画にも通じる「うつろい」「侘び・寂び」といった日本的な美意識を基盤に、日本独自の自然と風景を表現している。また、エンジニアとして、撮影から高精細プリント、額装までを自宅工房で一貫して手がけることにも強いこだわりを持つ。

2025年、「デジタル写真・シュルレアリスム」と「アクション・フォトグラフィー」の２つの小論文を自身のWEBサイトで発表。イタリアのAndrea Benetti氏の目に留まり、氏が構想・キュレーションを手がけ、ヴェネツィアを拠点とする国際現代アートプロジェクト「Atelier Quindici（アトリエ・クインディチ）」の創設メンバーとして参画した。



Sony World Photography Awards 2020　Professional “Natural World and Wildlife” 2nd

Artist Statement

被写体と光の数式を解き「美」を探求する

廣池は「美の探求」を一貫したテーマとして写真を制作している。その為に、論理的な思考で組み立てる風景写真と、無意識の表出を求める抽象写真、2つの両極端な表現を行っている。

彼は、幼少期から山や川に親しみ、自然への畏敬の念を抱いてきた。その感性の根底には、水墨画などの日本画に通じる「うつろい」「侘び・寂び」といった日本的な美意識がある。

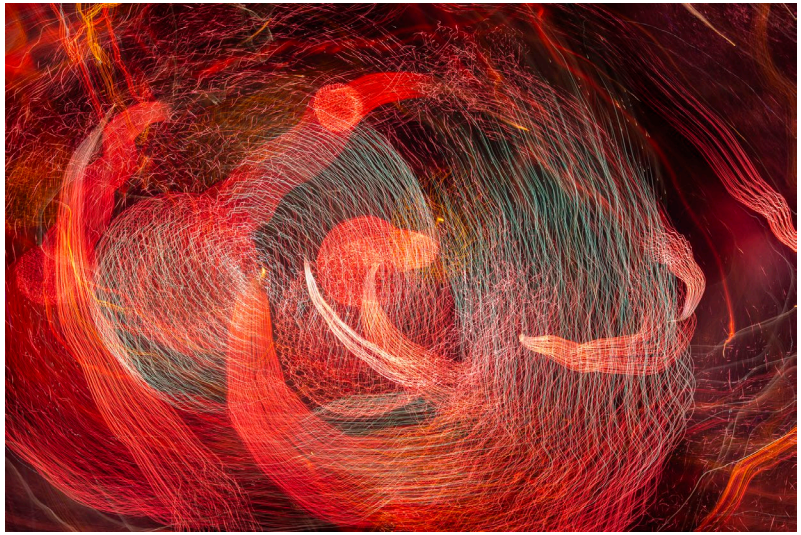
また、 30年以上のシステムエンジニアの経験をベースに、「写真とは何か」「美しさとは何か」を科学的・哲学的に問い続けている。10年以上取り組む「ヒメボタル」の撮影を通じ、写真を「瞬間の記録」ではなく「四次元空間（3次元の立体空間＋時間）を二次元平面に変換する装置」と再定義し、「時間」の操作によって、写真表現の可能性を拡張してきた。科学と芸術の融合がエンジニアとしての独自のアプローチだ。

その中で、生き物の動きやICM（Intentional Camera Movement）が生む偶然性を、20世紀の芸術運動「シュルレアリスム」の概念と結びつけ、「デジタル写真・シュルレアリスム」として再構築。膨大な枚数から直感で1枚を選ぶ行為、そして偶然の像を意図によって再構築する行為に、現代における無意識の表出を見出している。

また、画家ジャクソン・ポロックの「アクション・ペインティング」に対する写真表現からの現代的な応答として、ICM（Intentional Camera Movement）を中心に据えた「アクション・フォトグラフィー」を提唱した。

「物としての写真」にもこだわり、撮影だけでなく、高精細な大判プリントとパネル貼り、額装までを自宅工房で自ら手がけ、研究している。日本の技術に対する敬意と長年のエンジニアリングの経験に裏打ちされた、撮影から額装迄の徹底した制作プロセスが、彼の写真表現の核をなしている。





Essay ― デジタル写真・シュルレアリスム

Digital Photography Surrealism, 2025

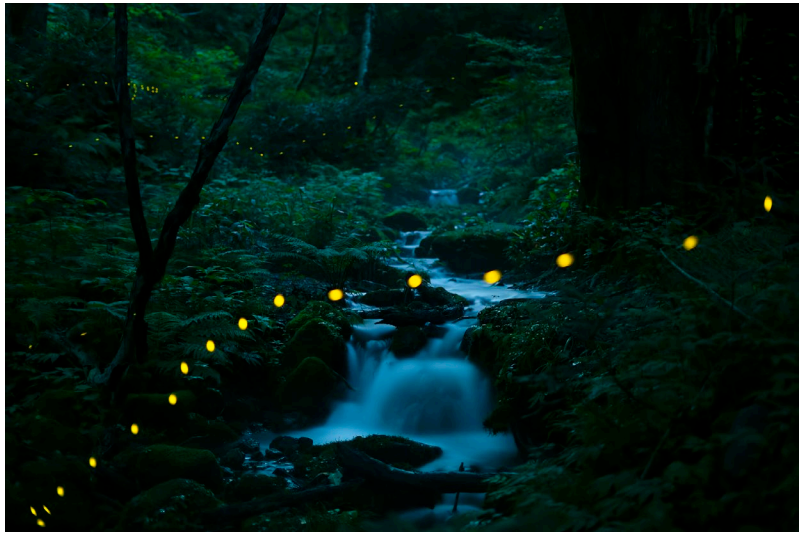
ヒメボタルの撮影を通じ、廣池は写真における「時間」と「偶然性」という2つの概念に辿り着いた。ヒメボタルはフラッシュのように瞬間的かつ一定間隔で発光する特殊な被写体で、露光時間は背景の明るさに影響するが、ヒメボタルの光の明るさには影響せず、写真上に現れる点や玉ボケの数に影響する。つまり、露光時間は、背景とヒメボタルの光跡とで異なる意味を持つ。この気づきから、彼は写真を「瞬間の記録装置」ではなく「四次元（3次元の空間＋時間）を二次元に変換する装置」として再定義した。また、ヒメボタルの飛翔は予測不能な偶然性に満ちており、それを写真の核とすれば、作者の意図を超えたイメージが構築される。

1924年にアンドレ・ブルトンが提唱した「シュルレアリスム」は、理性を超えた無意識を解放し「超現実」を描く芸術運動であるが、偶然性を核に据えた絵画表現もあった。廣池はこの概念を、デジタルカメラが持つ「膨大な枚数を撮影できる」「その場で確認し再撮影できる」という特性と結びつけ、「デジタル写真・シュルレアリスム」として再定義した。

その手法は二つ。一つは、偶然性を持たせて撮影した数千枚の中から、無意識の感覚と共鳴する一枚を直感で選ぶこと。もう一つは、ICM（Intentional Camera Movement）で生まれた偶然の像を、その場で確認しながら意図的に再構築すること。一般的に写真は、構図や光、絞りや露光時間などを論理的に考えて撮影する。しかし偶然性を持って出来上がった写真を「感じる」「選ぶ」時には無意識の美意識を発動できる。

これは単なる現実の記録ではなく、偶然と必然、理性を超えた無意識との対話から立ち上がる、現代における「超現実」の探求である。そして、現代におけるシュルレアリスムは単なる芸術の様式ではなく、「美しさとは何か」という芸術の根幹を哲学的かつ論理的、科学的に探求し続ける営み、そのものであると言える。





Essay ー アクション・フォトグラフィー

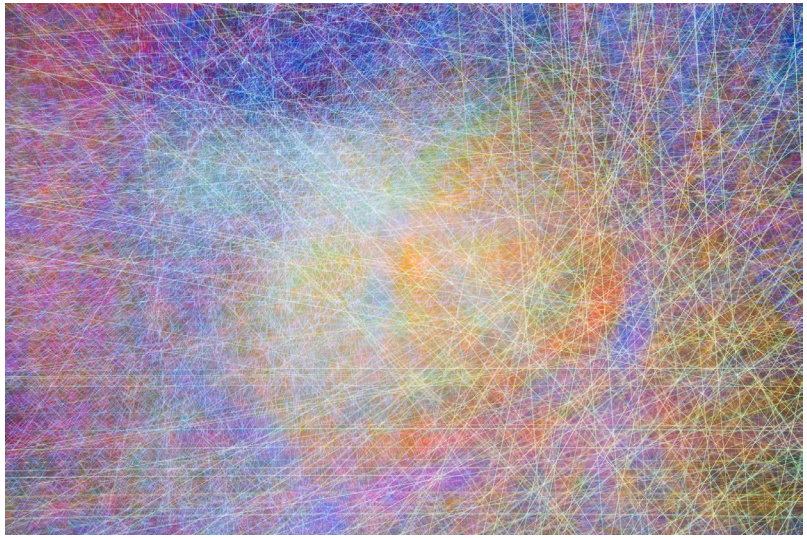
Action Photography, 2025

画家ジャクソン・ポロックは、シュルレアリスムの延長線上に「アクション・ペインティング」を確立し、絵具の物理特性と身体運動の偶然性をキャンバスに定着させた。廣池は「デジタル写真・シュルレアリスム」の延長線上で、ICM（Intentional Camera Movement）を中心に据えた「アクション・フォトグラフィー」を提唱する。

クリスマスライトや花火といった強い光をICMで撮影すると、光の変化は時間軸に沿って引き延ばされ、連続する軌跡として写る。また、リズミカルにカメラを動かし、踊るように撮影することで、身体性や偶然性を積極的に取り込み、それらを「行為の軌跡」として写真に定着させる事が出来る。

クリスマスライトを被写体とするとき、それは身体性が強く表れる「描く写真」となり、幾何学的でCGのような像となる。花火を被写体とすると、カメラの動きと花火の爆発エネルギーが偶然性 x 偶然性の効果で「生命の起源」となり、獣や鳥のようなビーストを生み出す。

「自由に撮る＞直感で感じる＞調整して撮る」というプロセスを繰り返すことで、偶然に生まれた像を無意識の美意識で受け取り、作者の意図によって再構築する。これは、無意識の表出を目指したシュルレアリスムの芸術であり、写真を“出来事の記録”から“行為の痕跡”へと再定位する、デジタルカメラでしか成し得ない表現領域を切り開く試みである。





Atelier Quindici(15)

現代アーティストとして

「Atelier Quindici (15)」は、イタリア美術振興協会が全額出資し、協会の創設メンバーの一人であるアンドレア・ベネッティ（Andrea Benetti）氏が構想・キュレーションを手がけ、ヴェネツィアにあるザグリ宮殿を拠点に設立された、現代アートに特化した国際プロジェクト。

以下の2つの機能を備えた独立組織として運営される。

・常設デジタルスペース： 参加アーティストの作品を世界へ向けて記録・発表
・ヴェネツィア本部： 国際レベルの展覧会、会議等を行う物理的拠点

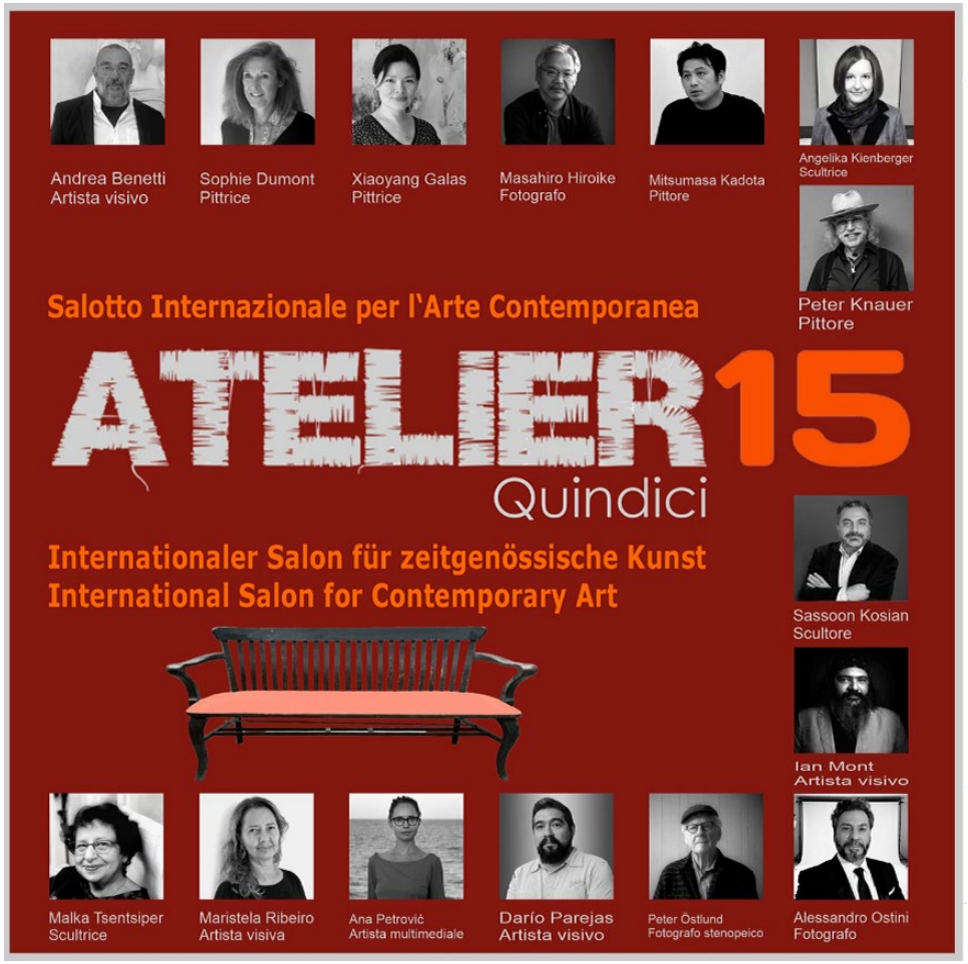
このプロジェクトは、世界のさまざまな地域、様々なジャンルで活動するアーティスト間の対話とコラボレーションのための安定した環境を創出し、意義深い芸術体験を記録し、結びつけ、発展させることを目的としている。

メンバーはベネッティ氏による直接のオファーにより、ヨーロッパ、アジア、中東、アメリカ大陸から、国際的に活躍する画家、彫刻家、美術家、写真家ら計15名の現代アーティストが選出され、それぞれ、美術史家や美術館の学芸員による批評文が寄稿されている。

廣池は、 「デジタル写真・シュルレアリスム」と「アクション・フォトグラフィー」の２つの小論文がベネッティ氏の目に留まり、日本人2名のうちの1人として、また唯一のデジタルカメラを用いる写真家として選出された。批評文は鳥取県立美術館館長・尾﨑信一郎氏に寄稿頂いた。

2026年の冬、イタリア、ミラノで初のグループ展示会が計画されている。

Website: https://www.atelierquindici.eu/en/



Exhibition — Poland Jelenia Góra

「Japonia」　Solo Exhibition, 2023

会場：ポーランド・イェレニャ・グーラ市 市営シエプリツェ自然史博物館

会期：2023年5月2日 ～ 7月14日

主催：イェレニャ・グーラ市立自然史博物館、下シレジア写真家・視聴覚芸術家協会





2020年にSony World Photography Awards で受賞した際、 Facebookでは海外から1万件以上の友達申請があり、世界109ヶ国・約4,000人と友達になった。その中の一人で、ポーランド・ ロワー・シレジア写真家・視聴覚芸術家協会会長であるズビグニェフ・ストクウォサ氏（Zibi氏）から「ポーランドで写真展を開かないか」と打診があり承諾したが、コロナ禍で延期され、2023年の5月に実現した。

タイトルは「Japonia（日本）」とし、日本各地の風景写真を31点展示した。

ドイツ国境に近いイェレニャ・グーラ市 は日本の軽井沢のような避暑地。ヴェルニサージュ（オープニングセレモニー）には、約150名の方々に参加して頂き、米子市の「Sea to Summit」で知り合ったミュンヘン在住の日本人歌手Niloさんが来場して歌唱してくれた。

Exhibition — 米子市美術館

「QUEST — 美の探求」　Solo Exhibition, 2021

会場：鳥取県米子市美術館 第2展示室

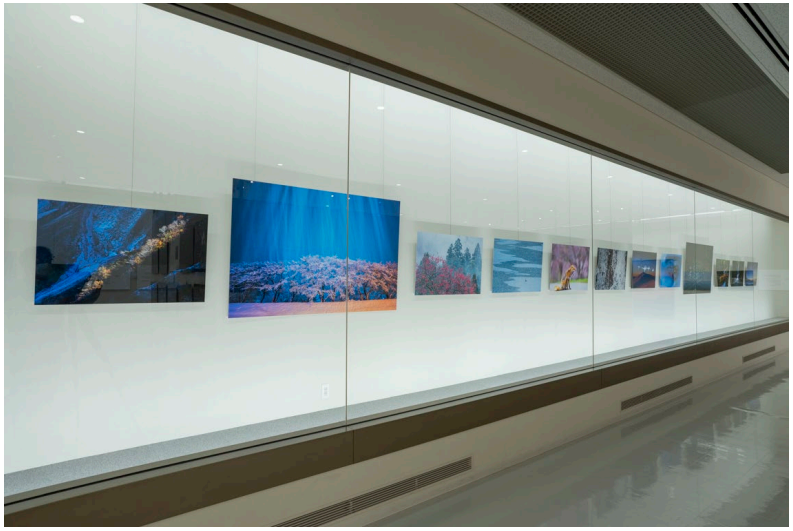
会期：2021年3月12日 ～ 3月23日

主催：写真家 廣池昌弘（鳥取県文化芸術活動支援補助金）



鳥取県文化芸術活動支援補助金を受けて開催した、初期の代表的な大規模個展

「QUEST — 美の探求」は、2019年12月に今井出版様から出版頂いた写真集のタイトルで、写真集とSony World Photography Awards等の受賞作から作品を選出。



大型プリンターとパネル張り機を導入し、全て自宅プリント工房でプリントとアルポリック加工を行い、全55点の大規模な展示会を実現した。

出展作品
3m×2m（タペストリー）　1点
B0（1.5m×1m　アルポリック加工）　10点
A1（90cm×60cm　アルポリック加工）　44点

来場者数：2000人

Award — Sony World Photography Awards 2020

【ソニーワールドフォトグラフィーアワード】
・World Photography Organisation（世界写真機構）が主催し、SONYの協賛
　現在世界で最も権威があるとされるフォトコンテスト、 2020年で開催13回目
・プロフェッショナル、一般、ユース、学生の４部門で構成され、プロフェッショナル部門に建築、ドキュメンタリー、風景、自然／野生生物等10種のカテゴリーがある

World Photography Organisation ：https://www.worldphoto.org/
日本プレスリリース：https://www.sony.co.jp/SonyInfo/News/Press/202006/20-047/



【廣池受賞概要】
・プロフェッショナル部門、自然・野生生物カテゴリーで第２位
・プロフェッショナル部門全体の応募総数は約13万5千
・ロンドンでの授賞式、世界各国での展示会が新型コロナウイルスの影響で中止
・2020年6月12日～7月9日　ソニーイメージングギャラリー銀座で受賞作品展開催
※　受賞作の1枚がSWPAのサイト全体で1年間バナー画像として使用された



【応募作品】
「ヒメボタル」（9枚組写真）
・2019年、鳥取県南部町、日南町、江府町で撮影
・8年前からホタルの生息地を研究しており、全て独自に調査した生息地で撮影
・受賞作品：https://bit.ly/39BTzvp

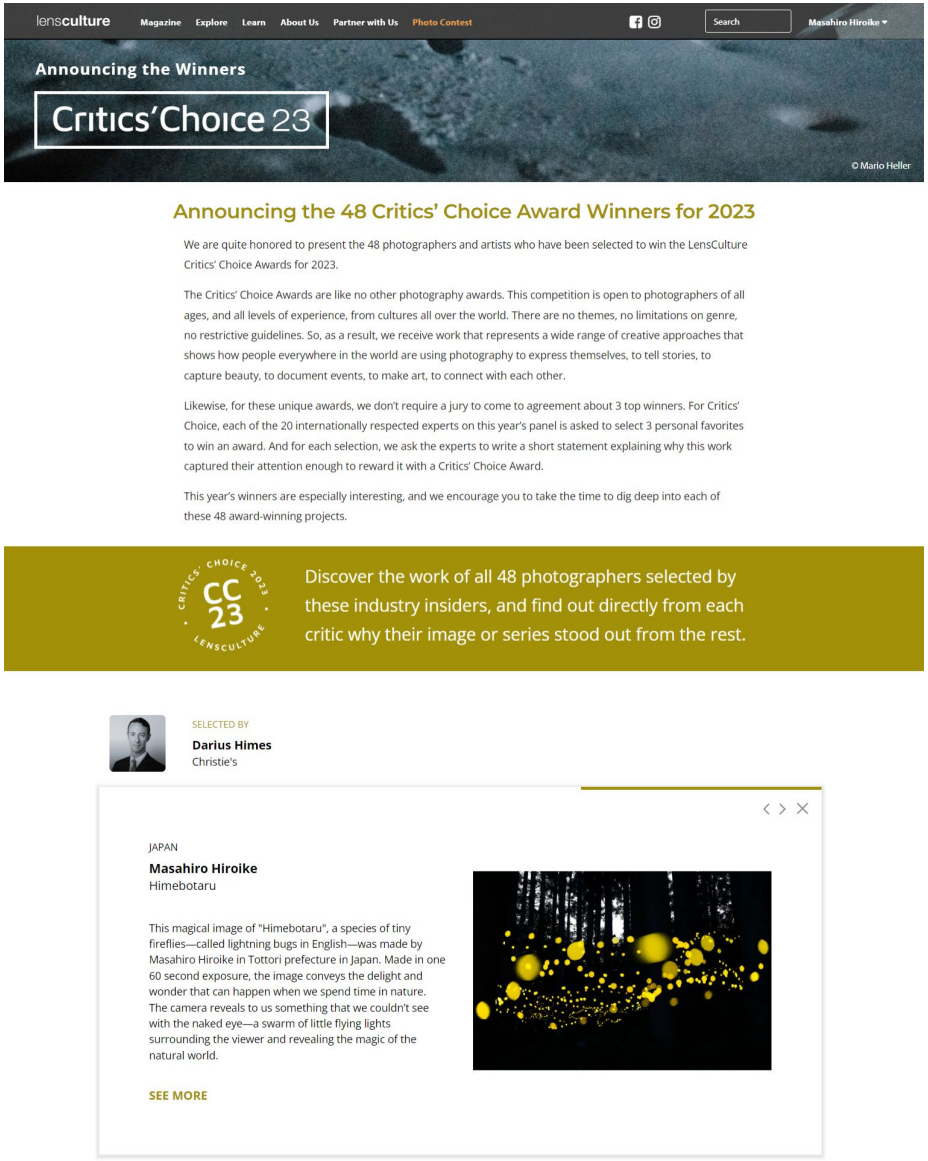
Award — LensCulture Critics’ Choice 2023

“LensCulture”はオランダのアムステルダムを拠点とする現代写真のネットワーク＆マガジンで、“Critics’ Choice”は20人の審査員がそれぞれ3作品を選ぶコンテスト。

https://www.lensculture.com/2023-lensculture-critics-choice-award-winners

【廣池受賞概要】
20人の審査員がそれぞれ3作品を選ぶコンテストで、オークションハウス“Christie’s”の写真国際責任者であるDarius Himes氏に選出された。

【応募作品】
2022年、鳥取県南部町で撮影した「ヒメボタル」



Print Lab

写真作品の制作

廣池は「物としての写真」にもこだわり、撮影だけでなく、高精細な大判プリントと額装までを自宅工房で自ら手がける。日本の技術に対する敬意とエンジニアリングの経験に裏打ちされた、徹底した制作プロセスそのものが、彼の写真表現の核をなしている。

機材

プリンター　：CANON pro-4100（12色　幅1118mmロール紙対応）
ラミネーター：GCL1600（コールドラミネーター　1600㎜幅）

製作可能範囲

プリント：1m x 5m
アルポリック加工：1m x 2m
アクリル加工：1m x 70ｃｍ
木・アルミ額装：1m x 2m





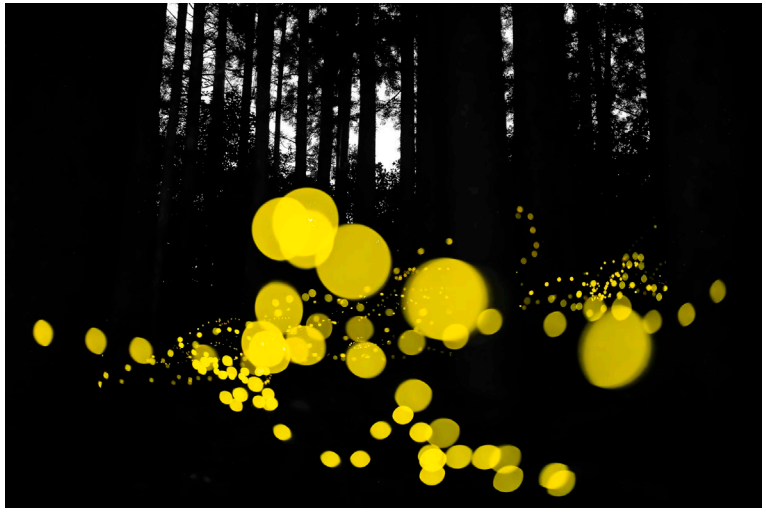




Works — Himebotaru (Digital Photography Surrealism)

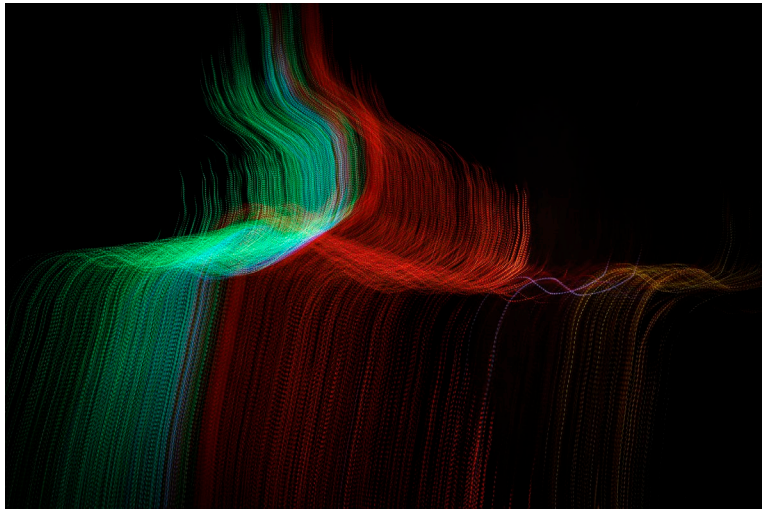


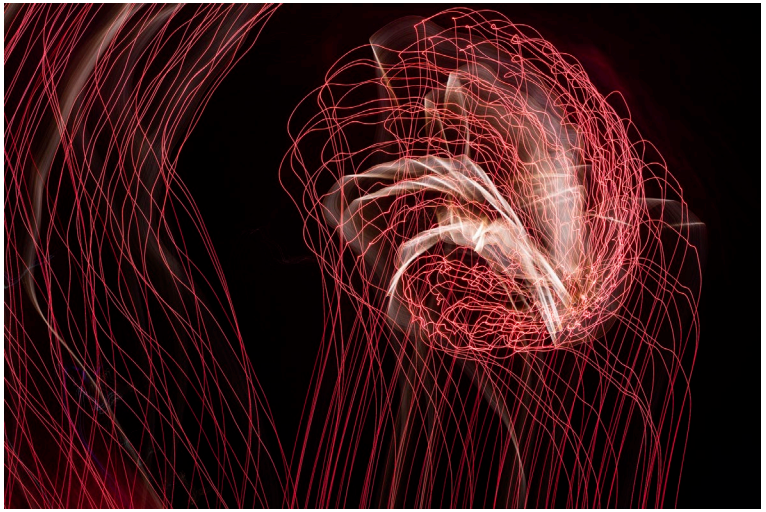


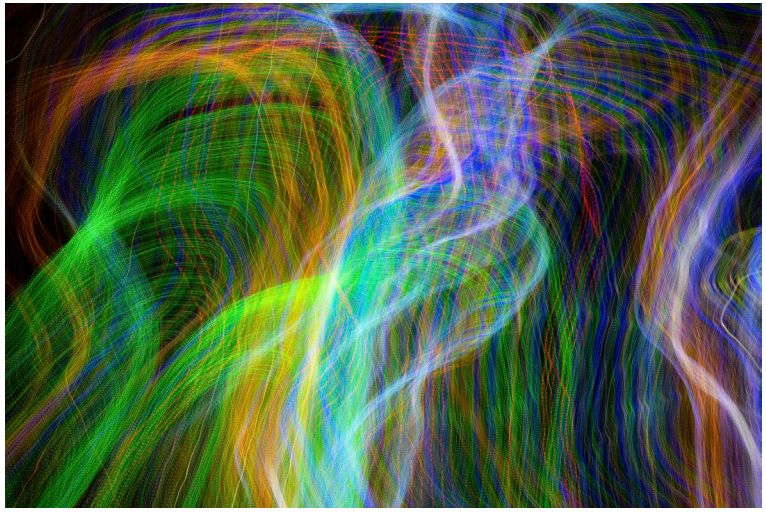


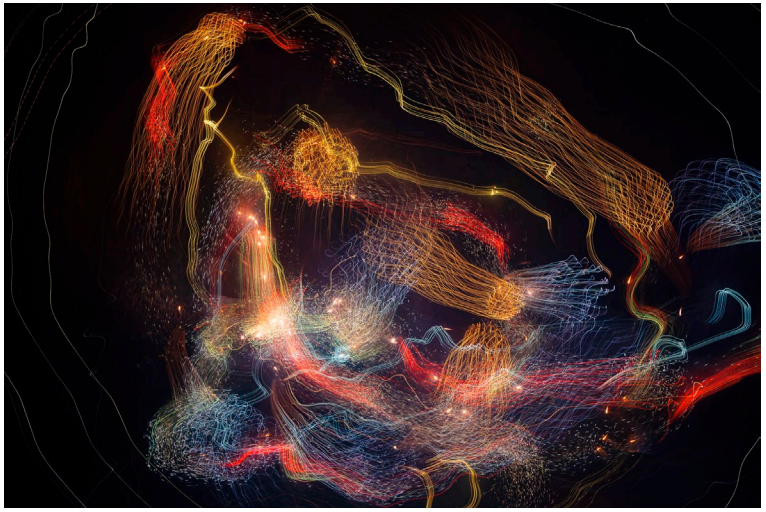


Works — Action Photography



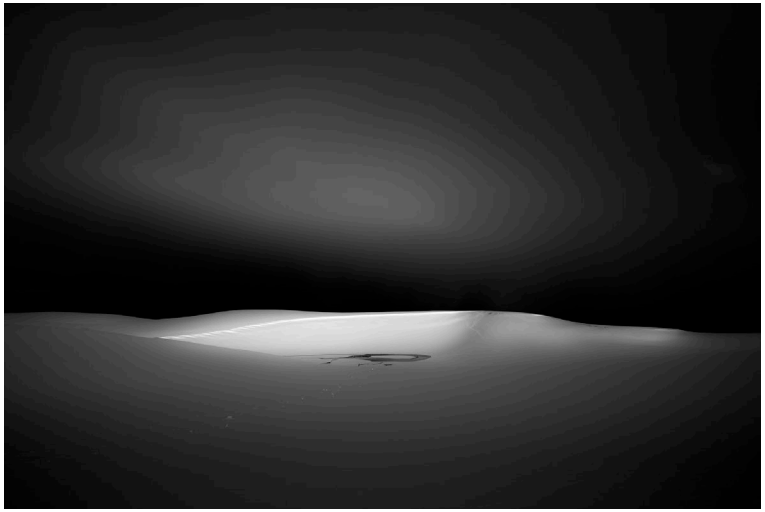




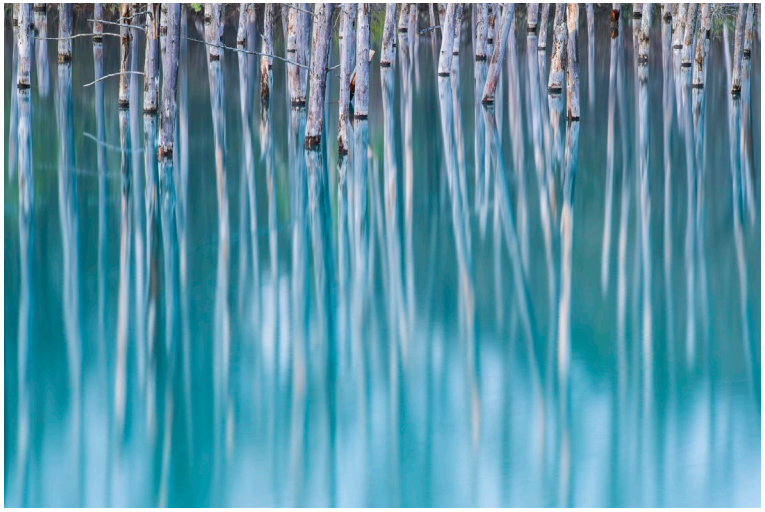


Works — Landscape





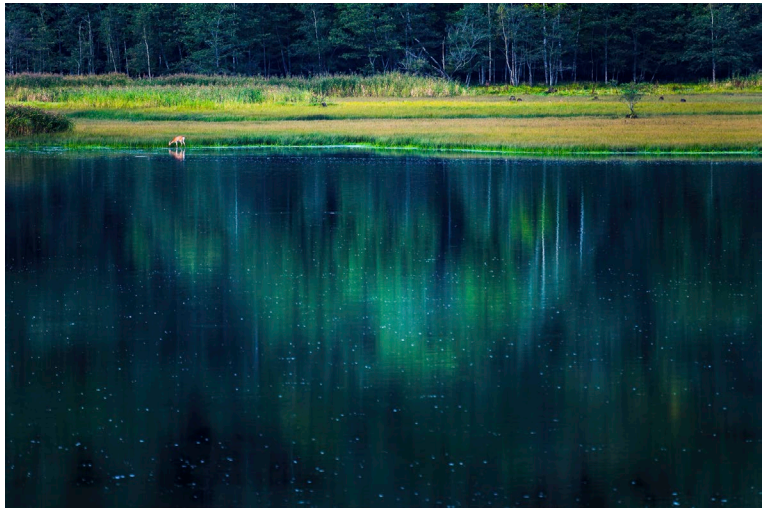




Works — Nature









プリント販売

現在、下記のオンライン・アート・販売サイトでプリント販売を行っている

日本：ArtGene
https://www.artgene.net/masahirohiroike/

全世界：ArtMajeur
https://www.artmajeur.com/masahiro-hiroike

全世界：FineArtAmerica
https://fineartamerica.com/profiles/masahiro-hiroike

北米：Picrem
https://www.pictorem.com/gallery/Masahiro.Hiroike

NFT：Opensea
https://opensea.io/KAGEROFU

※　販売サイトに掲載されていない作品についてはお問合せ下さい。

CONTACT

写真家 ・ 現代アーティスト
廣池 昌弘　Masahiro Hiroike

住所：〒683-0351　鳥取県南部町法勝寺668-8
Phone：+81 90 6212 4482

E-Mail：hiroike@masahirohiroike.com

Website: www.masahirohiroike.com

Facebook: https://www.facebook.com/masahiro.hiroike.photography/

Instagram: www.instagram.com/masahirohiroike/

X（NFT）：https://x.com/KagerofuArt